
あまりに少なかったあなたとの時間

丘澄絵梨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまりに少なかったあなたとの時間

【Nコード】

N2672D

【作者名】

丘澄絵梨奈

【あらすじ】

シリウスを失い、自分を責め続けるハリー。だがその夜、シリウスの鏡にある変化が…

第1章「鏡の変化」(前書き)

ファンサイト「月虹」さんのお題を元にした作品です。

第1章「鏡の変化」

授業が終わった夕方。

ハリーは寮へ戻らず、一人で庭に出た。

そして、その場に腰を下ろした。

(…シリウス……)

ハリーはまだ、シリウスが死んだという現実を受け入れることができなかった。

頭ではわかっていても、気持ちの整理ができていなかった。

「シリウス… 僕はまだ信じられないよ。あなたがいなくなってしまうなんて…。 だけど、僕がヴォルデモートの罠にはまりさえしなければ、あなたはあんなことにはならなかった。ごめんなさい。シリウス」

次の瞬間、頬から一筋の涙がこぼれ落ちた。

ハリーはひざに顔をうめて泣き出した。

数分後。

ハリーの肩に、そっと手が置かれたような感覚がした。

泣いていたハリーは、涙を拭いて 振り向いた。

そばには誰一人いなかった。

(気のせいかな…?)

ハリーは立ち上がり、ホグワーツへと戻っていった。

大広間で夕食を終えたハリーは、寮の寝室へと向かった。

トランクの中にしてしまっている 割れた鏡を取り出して、ベッドに腰掛けた。

グリモールド・プレイス12番地で、別れ際にシリウスから渡されたものである。

(シリウス… あなたと過ごせた時間は、あまりにも短かった…)

一瞬、その鏡に光が差し込んだかに見えた。

ハリーは鏡のかけらを手に取り、じっと見つめた。

特に変化はない。

ハリーは鏡をトランクの中にしまい、ふたを閉めた。

夜。

ハリーはベッドに横になり、目を閉じた。

しかし、安らかな眠りにはならなかった。

神秘部での出来事が、悪夢としてよみがえったのだ。

「シリ… ウス… 僕のせいで、ごめんなさい…」

ハリーの頬を涙が伝う。

そして、数分後。

「… リー… ハリー… ハリー」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、ハリーはゆっくり目を開けた。

最終章「希望の明日へ」

「誰？ 誰なの…？」

めがねをかけて起き上がったハリーは、トランクの中が異様に明るくなっていることに気づいた。

（あの中は、確か…！）

ハリーは音を立てないように気をつけながら、ベッドから降りた。そして、トランクのふたをそつと開けた。

シリウスの鏡のかげらの一部が光を放っている。

（まさか… ここから…？）

半信半疑でハリーは鏡を見つめた。直後、聞き覚えのある声が響いた。

「聞こえるか…？ ハリー。 私だ」

（……シリ…ウス…！？）

ハリーはわずかな期待をこめて、杖を手にとった。

「レパロ！」

割れていた鏡が元に戻っていく。

ハリーは眠っているロンや他のみんなを起こさないように気をつけながら、透明マントをかぶった。

そしてそつと、寝室を抜け出した。

談話室と寝室とを結ぶ廊下に立ったハリーは、修復した鏡を手に持ち、自分の顔の高さまで持ち上げた。誰かに見つかってもまずいと思い、透明マントはかぶったままだった。

「シリウス…」

ハリーは震える声で、彼の名前を呼んだ。

鏡が明るさを増し、徐々に人の姿を形作っていく。

そしてそこに映し出されたのは、ハリーが会いたくてたまらなか

った、名付け親の姿だった。

「ハリー」

鏡の中のシリウスが微笑んだ。

「本当に… シリウスなの…？」

「ああ、私だ」

「あなたは… 死んでいるの？」

その問いに、シリウスはゆっくりとうなずいた。

「すまない、ハリー。君にこんな辛い思いをさせてしまって」

その言葉をさえぎるように、ハリーが叫んだ。

「シリウス…！ ごめんなさい。僕のせいで…！！」

「ハリー、そんなに自分を責めなくていい。私の死は君のせいじゃない」

「でも僕がヴォルデモートの罠にはまりさえしなければ、あなたはあんなことにはならなかった…！ 僕が… あなたの時間を止めてしまった。本当にごめんなさい…」

ハリーの瞳から涙が零れ落ちた。

「ハリー、謝る必要はないよ。君は何も悪くない。私のことで、これ以上自分をおいつめないでくれ。君には幸せになってほしいんだよ」

「シリウス…」

「私と君が過ごせた2年間は、君にとってはわずかな時間だったかもしれないが、私にとっては有意義な時間だった。そして何より、私の無実を君が信じてずっと待っていてくれたことがとてもうれしかったよ。一緒に暮らすことはできなくなってしまったが、ハリー、忘れないでくれ。たとえ姿が見えなくても、私は君のそばにいる。君をずっと見守っているよ」

「シリウス…」

ハリーは少し微笑んだ。

その微笑みに、シリウスもホツとしたような笑顔を見せる。

「君のその表情を見て、少し安心したよ。ハリー。庭にいたとき

みたいに、思いつめた表情では、私も辛い」

「庭にいたとき…」

ハリーはハツとして、記憶を手繰り寄せた。

夕方に一人で庭で泣いていたとき、肩に感じた手の感覚を思い出した。

「あれって…、シリウスだったの？」

「心配になってね。様子を見にきたんだ」

ハリーの心の中に、あたたかいものが広がった。

「優しくて、なんだか励ましてくれていたみたいで、うれしかった。振り向いたときには誰もいなかったから、気のせいかなって思ったけれど、そうじゃなかったんだね。僕のこと、見守ってくれていたんだね。ありがとう。シリウス」

「そろそろ部屋に戻ったほうがいいだろう。起こしてしまってます

まなかつたね」

「ううん。あなたと話ができてうれしかった」

ハリーはそういって、シリウスに微笑んだ。

同時に彼は、シリウスと話せるのはもうこれきりだろうと悟った。「私はいつも君のそばにいるよ。君のすぐそばに。私だけじゃなく、ジェームズやリリーもね。ハリー、愛する人は決して離れさせはしないよ。いつまでも、君の心の中に生き続けている」

その言葉を残し、シリウスの姿は鏡から消えた。

シリウスが鏡から消えた後、ハリーの頬を一筋の涙が伝い流れた。

ハリーは慌てて、手で涙をぬぐうと、寝室へと戻っていった。

音を立てないように細心の注意をはらいながら鏡をしまい、透明マントを脱ぐと、再びベッドに横になった。

彼の脳裏には、シリウスが最後に言い残した言葉が焼きついていった。

シリウスの言葉は、ハリーにほんの少し勇気をくれた。

彼を失ったハリーが、再び1歩を踏み出すための勇気を。

(ありがとう、シリウス。 明日から少しずつ、前向きにがんばって
いくよ。 だから僕のことを見守っていて…)

最終章「希望の明日へ」（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

ハリー・ポッターのサイドストーリーを書くのは今回が初めてなので、セリフの雰囲気等 おかしいところがあるかもしれませんが、ご了承くださいm (_ _) m。

この章にある、シリウスの「愛する人は決して離れさせはしない」というセリフは、映画「アズカバンの囚人」で実際に出てきたセリフです。

とても印象に残っていたので、取り入れました。

感想等いただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2672d/>

あまりに少なかったあなたとの時間

2010年10月8日15時52分発行